

メディア・リテラシー教育における 中国モデルの検討

WU Xueer

本稿は、中国におけるメディア・リテラシー教育の変遷を明らかにした。これまでの研究では、中国のメディア・リテラシー教育はいったいどういうものなのかはあまり言及されていなかった。また、特殊な国情によって、欧米から導入されたメディア・リテラシー教育は中国現地化の過程で、ある程度変化がみられたが、中国のメディア・リテラシー教育はメディア・リテラシー教育全体の一部として、研究する価値はあると考えられる。

中国におけるメディア・リテラシー教育の全体像を把握するために、メディア・リテラシーのテキスト、教育関係者のインタビューなどを通じて、メディア・リテラシー教育が最初に中国に紹介された原因をはじめ、様々な面から考察を試みた。

序章は現代社会におけるメディア環境の急変 —メディア教育の展開と研究について考察した。本章は中国においてメディア教育、メディア・リテラシーとメディア・リテラシー教育の概念を明らかにした。中国ではメディア教育、メディア・リテラシーとメディア・リテラシー教育の概念はほぼ合致しており、ただ時代によって、呼び方が違うだけだ。そして、中国のモデルについては保護主義とエンパワメント主義が結合されたモデルに近いかもしれないことが分かった。

第1章では、メディア・リテラシー教育の萌芽について述べた。まず、1997年は中国においてメディア・リテラシー元年と言われているが、1930年代の近代新聞、あるいは新聞教育がすでに中国人に最初のメディア・リテラシー教育を与えたという見解もある。しかし、これは現代的メディア・リテラシー教育のような思潮や発想にすぎず、前身と言えるが、まだ学説になっていないということが分かった。次に、教育の必要性への覚醒について論じた。中国社会における一連の社会調査と国外の交流報告に加え、報業改革、素質教育、フェミニズム運動の興起は中国のメディア・リテラシー教育の導入の基礎であることが分かった。また、メディア・リテラシー教育に影響を及ぼす社会環境(政治的、経済的、文化的)についても言及した。

第2章では、中国におけるメディア・リテラシー教育の発展について、下から上へと上から下へと

いう2つの流派の分け方は適切ではない。実際、政府関係者向けの教育以外、社会運動と学校教育両方とも自動的に下から上へという流れから発展してきたことが分かった。また、デジタル時代における中国のメディア環境及びメディア・リテラシー研究の近況も論述した。

第3章では、各現場の展開から、特に小学校を例としてメディア・リテラシー教育実践における教育目的の相違を論じた。また、教師トレーニングにおけるメディア・リテラシー教育の実践展開についても分析を試みた。

第4章では、まずは中国における発展傾向について、メディア德育の興起はなぜなのかを論じた。次には、「メディア・リテラシー教育が中国に導入された時、その核心的価値である『政治の再現』や自主権、公民社会を広げる権利など批判の声を増幅させることは弱められた。社会的性差という盲点が現れ、労働者階級、抑圧された女性やその他の社会的弱者(マイノリティ)の権力を高めるべきメディア・リテラシー教育が、ただの『社会的弱者の素質を向上させるため』の、彼らの主体性を低下させる運動に変わってしまった」というト(2011)の観点は再検討の余地があると分析した。

最後は、中国のメディア・リテラシー教育が常に疑われていきた背後にある理由の一つを明らかにした。それは、欧米の伝統のメディア・リテラシー教育は、マイナス効果(負面方向)の導きをメディア・リテラシー理論の学術基礎としているが、中国のメディア・リテラシー教育は、メディアやメディア情報を正面な積極的態度で扱い、積極効果の正面方向を提唱してきたからである。なお、メディア・リテラシー教育における高校・大学段階の展開について述べた。

第5章では、メディア・リテラシー教育における社会運動の展開は、欧米の理論的影響及び南米の実践的影響を受けていることが分かった。また、フェミニズムと人権はどのようにメディア・リテラシー教育と結びつくか、かつ日本との比較も簡単に論じた。

終章では、中国におけるメディア・リテラシー教育の全体像から、系統的に中国のメディア・リテラシー教育はいったい何ものを描いた。

中国におけるメディア・リテラシー教育の全体像を捉えるために、これからの研究は社会的な文脈、古今東西をもっと深く分析し、ほかの視点から考察する必要がある。本稿で明らかになった中国におけるメディア・リテラシー教育の流れが今後の研究の参考になることを期待する。